

説教 「憐れみの神」

(ホセア書 6 章 1-6 節 マタイによる福音書 9 章 9-

13 節)

2021 年 7 月 25 日 主日礼拝説教

日本基督教団仙川教会

大串肇

イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った (マタイ 9:9)

「マタイ」という名の人物に関しては、わたしたちが知っている情報はごく僅かです。ただここで明らかなことは、イエスの弟子になった彼はかつて徴税人であったと事だけです。この徴税人とは何か。当時ローマ帝国のもとには各属州にはローマの税金を徴収する請負人たちが置かれ大きな権限が与えられていました。税額は彼らの裁量でどうにでもなったのです。そこで実際に不正がなされ、私服を肥やす者もいたのです。また、このような経済的優位や特権ばかりではなく、彼らはユダヤ人が忌み嫌う外国人＝異邦人であるローマに仕えているゆえに、人々から軽蔑され、罪人と見なされていました。徴税人は経済的には裕福であったにもかかわらず、彼らは同胞たちからは軽蔑を受け、社会から孤立していました。

「わたしに従ってきなさい」。

このイエスの一言が彼を孤独の中から救い出しました。そしてイエスはマタイを自分の家に招いたのです。イエスはそこで彼と共に食事をしました。すると、同じような「徴税人」や、「罪人」と呼ばれていた人たちが大勢訪れて、共に食事をしたのです。

イエスはその家で食事をしておられたときのことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた。(10 節)

食事をするということは、親しい関係になった、友人となった、仲間になった

ということです。しかし、当時のユダヤの社会ではあり得ませんでした。罪人と呼ばれるような人々とかかわること自体、汚れたことでした。そこで、

「ファリサイ派の人々はこれを見て、弟子たちに、『なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか』と言った」。（11 節）

イエスは罪人たちと食事をしたために周りの人々から非難を受けました。なかでも宗教的な指導者であったファリサイ派の人々から激しい非難を受けたのです。彼らは確かに熱心な人々でした。しかし自分たちだけが優れたものであり、正しい人間だと信じ込んでしまったのです。ですから、他の人々を見下したり、軽蔑したりしていたのです。そこでイエスはこう語られました。

「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。13 『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」（12-13 節）

イエスは旧約聖書の言葉を引用して反論しました。神の求めているものは多くの犠牲ではなく、「憐れみ」であると言われました。自分は正しいと思って人々を裁いている人たちがほんとうの意味で、彼らは救われるのではなく、自分こそが神の前にあって罪深い者であると悔い改め、神の赦しをこい願う者は救われるのです。神の赦しを受けるには犠牲はいりません。それはイエスこそがわたしたちの罪の犠牲として捧げられ、わたしたちはすべて赦されたからです。これこそ神の憐れみでした。この神の憐れみはイエスとの出会いを通して与えられます。イエスに愛され、神に赦されて生きることの喜びがあります。この神の憐れみが与えられたからこそ、わたしたちは互いに赦し合うことができるのではないのでしょうか。この神の憐れみこそ、わたしたちが心から神を愛し、また互いに愛し合うエネルギーとなる力なのです。

マタイはこのイエスとの出会いから人生が一変しました。ローマに仕えるのではなく、キリストに仕える者となりました。この使徒マタイの名前は、イエス・キリストのご生涯を書き記した四つの福音書中で一番はじめの福音書の著者の名として世界中の人たちに愛されるに至ったのです。

わたしたちはこのキリストの招きに心の耳を傾け、キリストがわたしたちの友となってくださったこと、わたしたちも互いに友として生きる喜び、神に仕え、他者にも仕える人生を歩んでまいりたいと思います。ご一緒にお祈りいたしましょう。